

令和7年9月16日

<JH8CBH>

第50回JARL 渡島檜山支部大会での氏家さんの講演のまとめ

1 氏家さんとの出会い

3年前、八戸で支部大会が開催された際のことです。

「かつて8J8JOMONの開設でたいへんお世話になった大向さんに、ぜひご挨拶をしたい。」そんな思いが募り、急遽青森県の支部大会に参加したくなり、一般参加という形で新幹線に乗り、八戸へ向かいました。そこで行われた講演の講師が、氏家さんでした。そのお話があまりにも感動的で、講演時間は一時間ほどだったと思いますが、私はすっかり氏家さんの語りに引き込まれてしまいました。

講演の最後には、お礼の気持ちも込めて「南極に行かれて、人生観はどのように変わりましたか？」といった質問をしたように記憶しています。氏家さんはその問いに、非常に丁寧に答えてくださいました。

2 第50回の支部大会の講演

今回の支部大会は、私が支部長になって2回目の開催となります。去年はパネルディスカッションと分科会という形式を試みましたが、残念ながらうまくいきませんでした。そこで今回は、講演を中心とした構成にしようという方針に切り替えました。

実は、当初の講師は氏家さんでは

ありませんでした。JARL NEWSにも掲載されているように、昨年のうちに総合通信局の方に、電波監視に関するテーマで講演をお願いし、快くご承諾いただいていた。これは、電波適正利用推進協議会の研修会で伺った内容が非常に素晴らしく、ぜひ会員の皆さんにも聞いていただきたいと思ったからです。

ところが7月に入り、総合通信局から「講師の派遣が難しい」との連絡がありました。先方の事情です。仕方がありませんが、頭が真っ白になったのを覚えています。それでも前に進まなければなりません。講演は誰でもできるものではなく、素晴らしい実践をされている方でも、それを人に伝えるには話す力が求められます。

その時、数名の候補が頭に浮かびました。もちろん氏家さんもその一人です。氏家さんに来ていただければ、参加者の心に残る講演になることは間違いありません。ただ、八戸での支部大会では、私は遠くからお話を聞いていただけの一参加者であり、面識があるわけではありませんでした。

そんな中、地方本部会議で本部長から「支部大会はとても大切なイベントです。お金をかけるべきところにはしっかりかけて、会員に満足い

ただける大会にしてほしい」との力強い後押しをいただきました。それを受けて、氏家さんに連絡してみようと決意しました。

氏家さんの唯一の手がかりは、コールサインと jarl.com のメールアドレス。「返事が来なくても仕方ない」と思いながらも、ほんのわずかな望みを託して、氏家さんとの出会いの経緯を簡単に述べ、講演のお願いをメールで送信しました。

すると、すぐに快諾のお返事が届きました。「講演料は不要、交通費のみで結構です」とのお申し出に、心から嬉しく思いました。年に何度あるかというほどの喜びでしたが、あの時は本当に嬉しかったです。すぐに連絡先を伺い、電話でご挨拶と打ち合わせをさせていただきました。

東京ハムフェアでは、氏家さんが南極ブースにいらっしゃるということで、会場に着くと真っ先に氏家さんの元へ向かいました。講演をお引



き受けいただいたことへの感謝を改めてお伝えすると、氏家さんは終始笑顔で応えてくださいました。

支部報での講演告知では、私が八戸で聞いた講演の印象をもとにPR文を綴り、氏家さんにもご確認いただきました。

3 氏家さんの講演

(1) 氏家さんと南極観測

氏家さんは、かつて総務省で通信関連の業務に携わっておられました。そのご縁から、南極での生活を二度経験されています。最初は二十数年前、そして二度目は6年前のこ



第50回 JARL 渡島檜山支部講師

演題「南極観測と8J1RLの運用」

第43次及び第61次 日本南極地域観測隊 通信担当

氏家 宏之さん

- ・現在は、全国陸上無線協会東北支部勤務 宮城県在住
- ・好きなものはアマチュア無線 JH7JCX、DIY、ドライブ

「家族や自分がどうなるかと最後まで帰ることができない。」そんな環境であることを知りながら南極隊員になった氏家さん。越冬隊員は寝食を一緒にする仲間。1年間以上限られたメンバーで生活する。越冬開始当初、各自に渡される UHF 無線機は携帯電話の無い南極での命綱となる。厳しい生活ではあるが、隊員の福利厚生としてバーもあれば多少の娯楽設備もある。アマチュア無線局の運用は、隊員によるクラブ活動うちの一つ。氏家さんはアクティブに運用した。オーロラ、満天の星、寒さの中生き抜く動物たち。心が洗われる日々だったそうだ。「南極観測は地球環境を考える貴重な研究」と氏家さんは語る。

とです。南極滞在中、インターネットを含む通信設備の進化には大変驚かれたそうです。専門は通信で、現地では管理棟を拠点に活動されていました。

趣味はご存じの通りアマチュア無線で、南極の局「8J1RL」ではCW（モールス通信）で積極的に運用されていたとのこと。氏家さんが観測隊として参加された年は、交信数も大きく伸びたそうです。

現在は、陸上無線協会に勤務されており、電波適正利用推進協議会の事務局も担当されています。



(2)南極の生活

南極観測隊は、活動期間によって「夏隊員」と「越冬隊」に分かれています。夏隊員は夏の間だけ滞在し、越冬隊は一年間を通して南極で活動します。以前は越冬隊の人数は約40名でしたが、現在は31名で編成されています。

南極へは船で向かいますが、途中には大嵐の海域があり、船が30度以上傾くこともあるそうです。その荒波を越えると、静かな氷の海へと入っていきます。基地の近くまで来ると、隊員はヘリコプターで基地へ移

動し、前任の隊員と交代します。

現地に着いて、夏の間合宿が行われます。研究者、料理人、医師、通信担当など、すべての隊員が協力して、ドームの修理や基地の保守などの作業に取り組みます。まさに、職種を超えたスクラム体制です。

観測隊は「観測部門」と「設営部門」に分かれており、氏家さんは設営部門の通信担当として活躍されました。

南極観測隊員になるには、専門分野の資格はもちろん、健康状態も厳しくチェックされます。歯の治療も重要で、メンタル面も選考基準のひとつです。何よりも、チームワークが求められる環境です。

基地内には、管理棟・宿泊棟を中心に、研究棟が周囲に点在しています。建物同士が繋がっていないのは、火災防止のためです。電源は2基の発電機で交代運転され、暖房もこの電力でまかなわれています。

宿泊棟は一人あたり約3畳の個室で、少し狭めですが、すべてシャワー付きトイレが完備されています。お風呂は24時間利用可能で、数人が同時に入れる広さです。近年は女性隊員も増えており、女性も快適に過ごせる環境が整っています。

基地にはバーもあり、アルコールは自由に飲めます（もちろん無料です）。ただし、料理担当が管理しており、消費量が多すぎると提供数を調整することもあるそうです。1年分を見越した管理がされています。

宿舎内には「ラーメン通り」と呼ばれる場所があり、全国のカップラーメンがずらりと並んでいます。自由に取って食べることができます。また、管理棟の近くにはお菓子がぎっしり詰まった倉庫があり、「デブ庫」と呼ばれているそうです。出入りは自由ですが、時には「最近お腹出てきたな」と冗談を言われる隊員もいるとか。

日本のテレビ放送は映りませんが、かつてはVHSやベータのテープが大量にありましたが、現在はDVDに置き換えられています。

生活が単調になりがちのため、誕生日会やお祭りなどのイベントも行われ、隊員たちはリフレッシュしています。食事イベント食が用意されることがあり、楽しみのひとつです。管理棟で育てたカイワレ大根が食卓に並ぶこともあるそうです。

インターネットはすべて衛星回線を使用しています。以前はWi-Fiが混雑して使いづらい時期もありましたが、現在は改善されてきています。電話も日本の事務所と内線でつながっており、連絡はスムーズに取れるようになっています。

(3)南極の自然

基地周辺の最低気温はおおよそ氷点下40度ですが、研究のために局へさらに近づくと、氷点下70度近くまで下がることもあるそうです。そんな環境では、ほんの一瞬で凍りついてしまうほどの寒さです。

オーロラは非常に身近に見えるよ

うですが、出現すると電波の伝搬状況が極めて悪くなるということです。美しい現象ですが、通信には大きな



影響があるようです。

ペンギンは2種類生息しており、海岸が真っ黒になるほどペンギンで埋め尽くされる光景も見られるそうです。自然保護の観点から、ペンギンには5メートル以内に近づいてはいけない決まりがあります。ただし、ペンギンの方から近づいてくる場合は、それは仕方がないとのことでした。

ブリザードが発生すると、ほとんど前が見えないほどの猛吹雪になります。実際に、ものすごい風が吹き荒れる様子を映像で確認しました。

また、一日中太陽が沈まない時期、そして、一日中太陽が見えない時期があるのも特徴の一つです。

(4)通信

通信は、短波帯と超短波帯(VU帯)に分かれています。短波帯の送信出力は2kWで、以前より出力は抑えられているものの、通信には十分な性能を保っているそうです。VU帯の出力は50Wで、いずれの送信機やアンテナも管理棟から離れた

場所に設置されています。万が一に備え、管理棟にも予備の送受信機とアンテナが用意されています。

すべての隊員には、5wのUHF帯の無線機が個人管理のもと支給されており、これは緊急時の命綱にもなる重要な装備です。

移動にはヘリコプターが使われるため、航空通信に対応した無線設備も整備されています。

通信台には電鍵も備え付けられており、モールス通信にも対応しているようです。

(5)8J1RL

8J1RLは、JARL（日本アマチュア無線連盟）の南極における無線局です。南極は、国際的な取り決めにより、どの国にも属さない地域とされています。そのため、日本の固定局として免許を取得することはできず、「移動局」として運用されており、最大空中線電力は50ワットに制限されています。

短波帯のアンテナには八木アンテナも使用されていますが、南極は非常に強風が吹く地域のため、ローターは設置されておらず、すべてJA（日本）向けに固定されています。それでも風による破損が多く、



定期的なメンテナンスが欠かせないそうです。

アマチュア無線は隊内のクラブ活動の一環として行われており、免許を持つ隊員が担当します。氏家さんの隊では、免許を持つ方は複数いたものの、実際に運用していたのは氏家さんともう一人程度だったそうです。このように、隊によって運用の活発さには差が出るようです。

氏家さんはCW（モールス通信）を中心に、かなり積極的にオンエアしていたとのことでした。

南極からCQを出しても、しばらく応答がないこともありますが、一度交信が成立すると、クラスタに掲載されて一気にパイルアップになるそうです。その際には「UP」（セパレート運用）などの工夫も必要になります。

オンエアの時間帯は、日本時間の午後8時過ぎが多いとのことでした。その時間帯に21MHz帯で南極からのCQを受信できれば、交信のチャンスです。

(6)最後に

南極では、何があっても1年間は帰ることができないという特別な生活が続きます。

その厳しい環境の中でも、隊員たちは多くの新しい発見をし、仲間との絆を深めていくそうです。南極観測隊は一般公募も行われており、最近では「教員枠」も設けられ、実際に参加された先生もいらっしゃいます。

す。興味のある方は、ぜひ挑戦してみる価値があるでしょう。

4 感想

一時間の間、氏家さんのお話にすっかり引き込まれてしまいました。聞いていた皆さんの表情もとてもすてきで、50回記念に氏家さんをお招きできたことは、大正解だったと思います。

私たちは日々、現実社会の中でもがきながらも楽しみを見つけて生きています。「南極での一年」とまではいかななくても、時には思い切って新

しい世界に飛び込んでみる、新しいことに挑戦してみる——そんな勇気も大切なのではないかと感じました。生きていることのすばらしさ、仲間のありがたさ、自然の豊かさと尊さ、これまで当たり前すぎて意識してこなかったことが、まったく違う角度から見えてくるような気がします。

氏家さんのお話を通して、直接ではないにせよ、そんな気づきを得ることができました。

2025/9/16 佐々木 朗